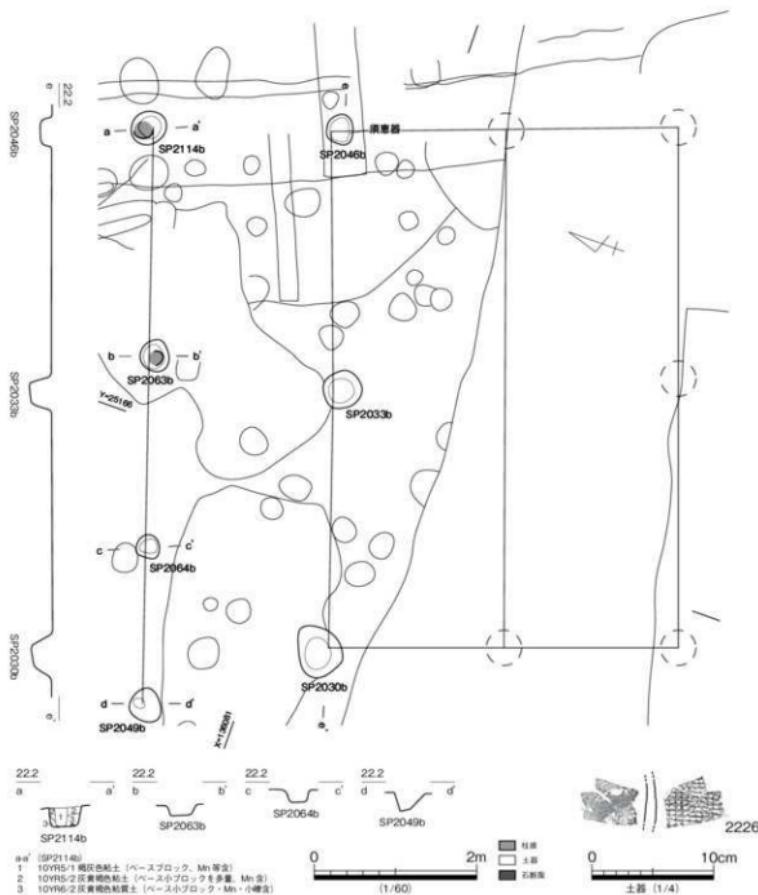


第4節 古墳時代後期以後の遺構・遺物

第1項 掘立柱建物

(1) SB2001b

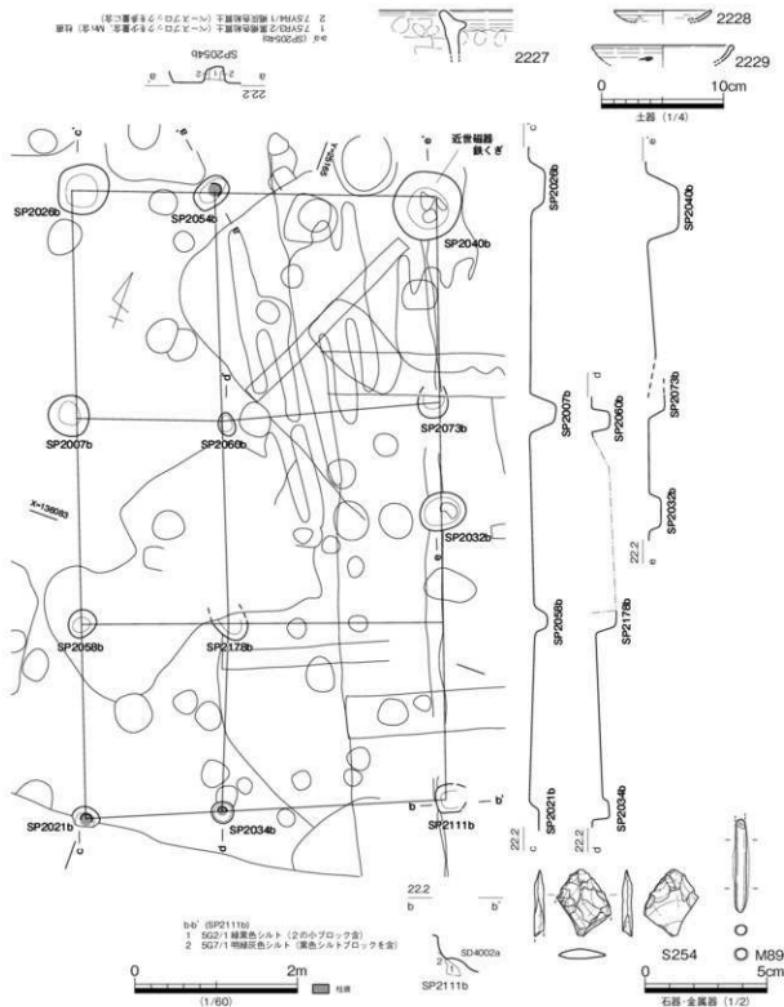
2区南西部で検出した北庇付の掘立柱建物である。梁間の柱数は不明だが、桁行は2間で構成する。建物主軸は北から70度東に偏る。柱間は3.2mで北側2.2mの位置に柱間2~2.5mで柱間3間の庇が付く。SP2046bより外面格子目叩きで内面ナデ調整の須恵器片が出土した。古代以後の建物と推察する。



第339図 SB2001b 平・断面図 出土遺物実測図

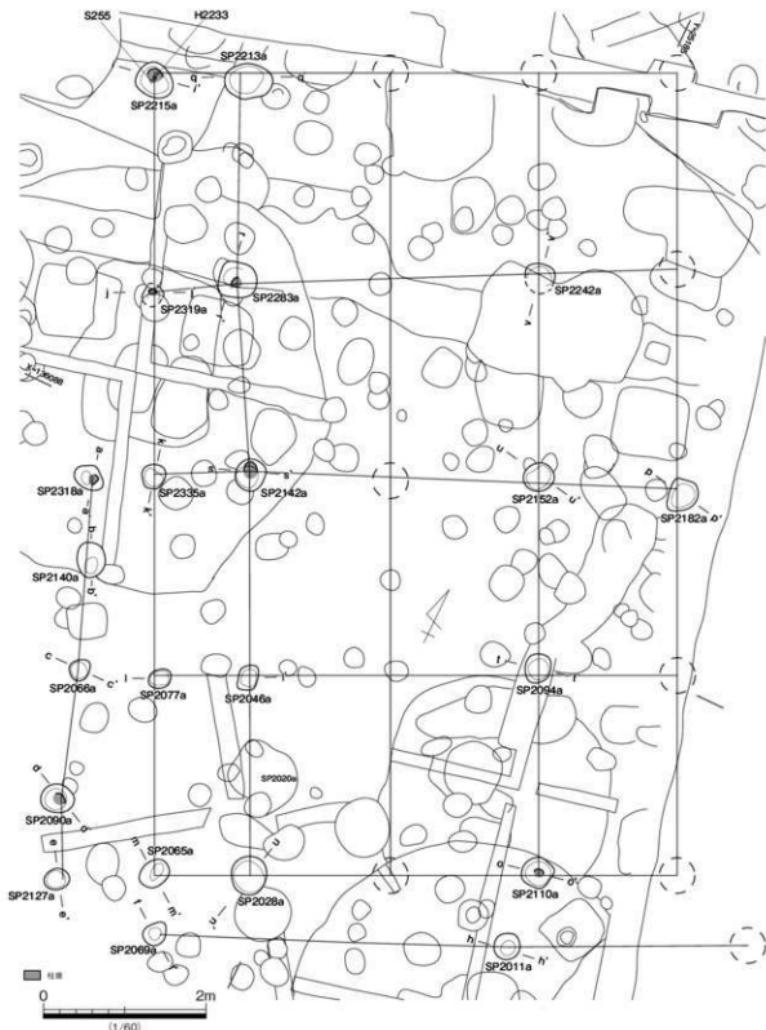
(2) SB2002b

2 区南西部で検出した南北棟の掘立柱建物である。梁間 2 間 (4.5 m)、桁行 3 間 (7.5 m) で床束柱が 2 基付属する。建物主軸は北から 21 度西に偏る。埋土より陶器燈明皿 (2228)、磁器小皿 (2229)、土師器土釜 (2227) が出土した。近世後半に属す。そのほかに混在してサスカイト製剝片 S254 が出土した。M89 は断面が端正な円形を呈す鉄釘である。



(3) SB2394a

2区東端で検出した南北棟の掘立柱建物である。梁間3間(5.4m)、桁行4間(9.9m)で西側に1.0m離れて、庇を構成する柱穴が伴う。さらに西側と南側それぞれ0.8m離れて不規則な並びの小柱穴列で構成する構が伴う。建物主軸は北から25度西に偏る。なお、身舎西側柱ライン上にSP2020aが存在し、

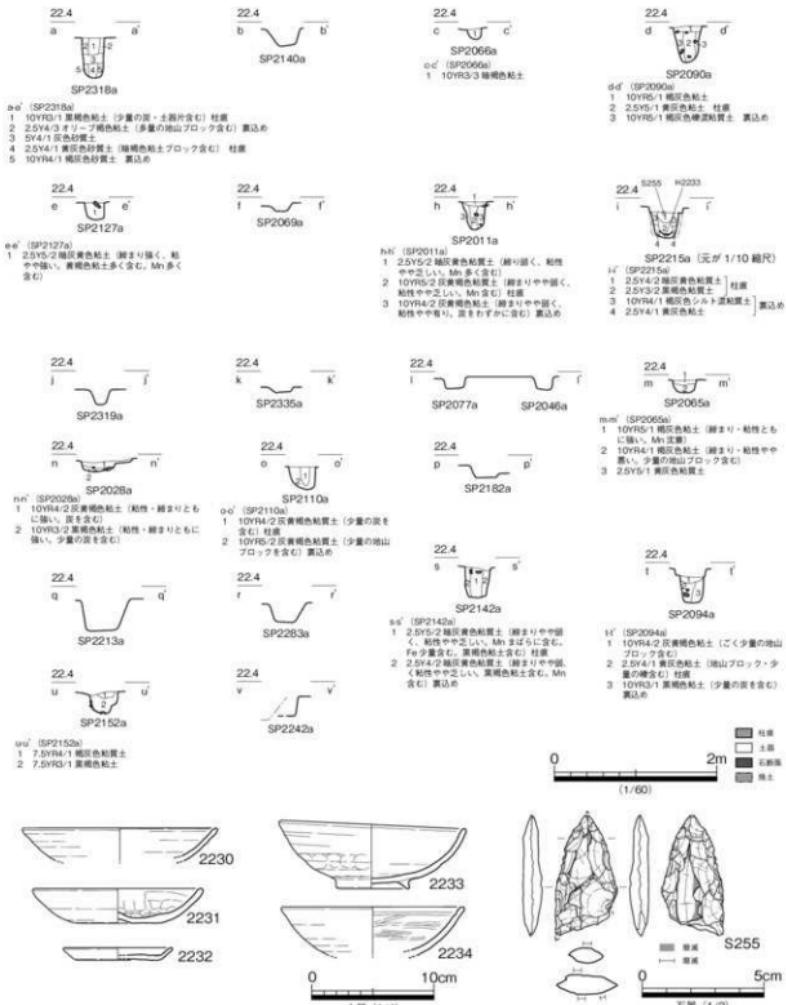


第341図 SB2394a 平面図

束柱の可能性がある（後説）。

土師質土器坏、小皿、椀、黑色土器碗が出土した。2233 の高台は断面三角形で下端が外に踏ん張る形態で 12 世紀後半にあたる。

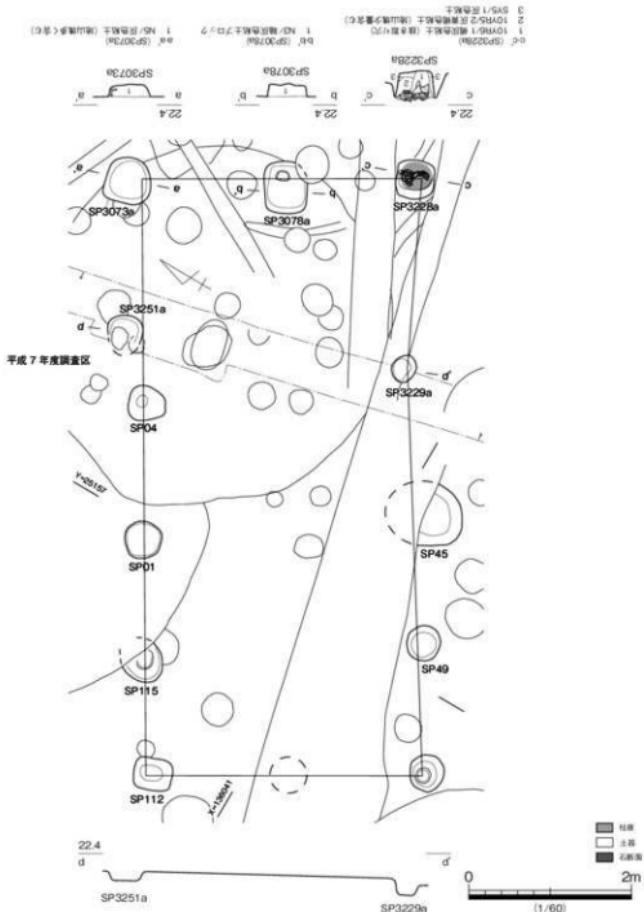
S255 はサスカイト製の大形打製石鎧である。素材面が磨滅しており、打製石庖丁の転用品である。

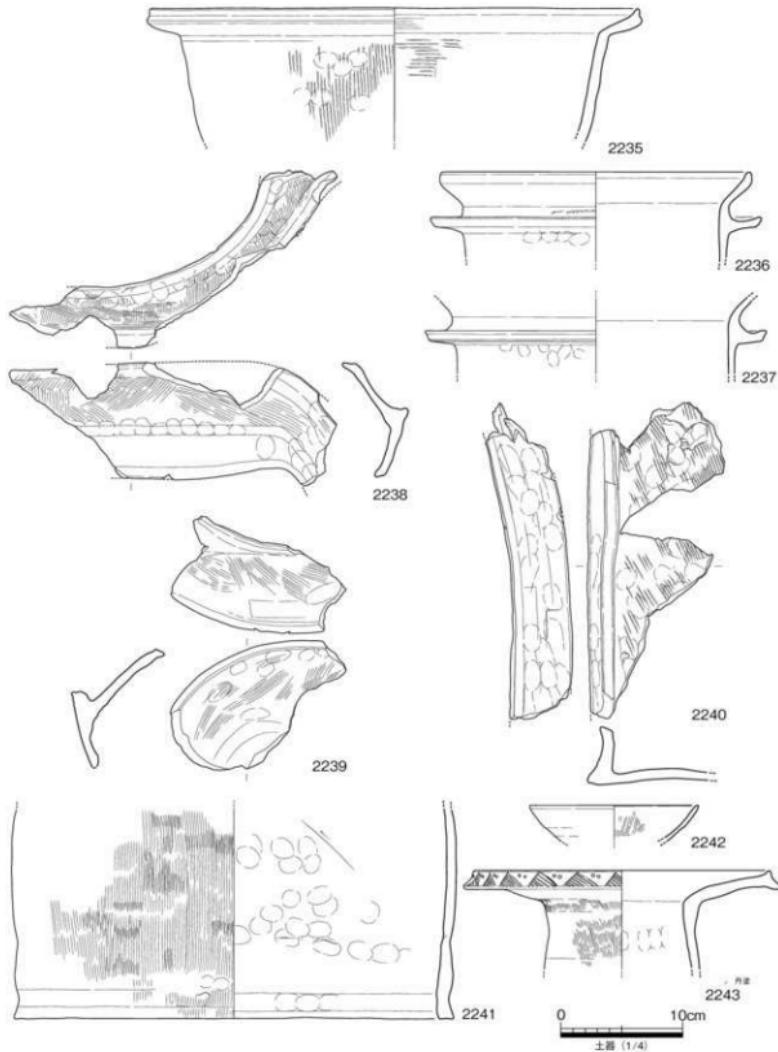


第 342 図 SB2394a 断面図 出土遺物実測図

(4) SB3306a

3区西端から平成7年度調査の研修棟調査区にまたがって検出した東西棟の掘立柱建物である。梁間2間(3.4m)、桁行4間(7.4m)の規模・構造である。建物主軸は北から63度東に偏る。古代11世紀の土師器の鉢、羽釜、竈、黒色土器碗が出土した。また、弥生時代後期後半の丹塗の器台2243が出土した。口縁部にA1類の鋸歯文を施文する。胎土中に角閃石・黒雲母を多数含む備中産である。

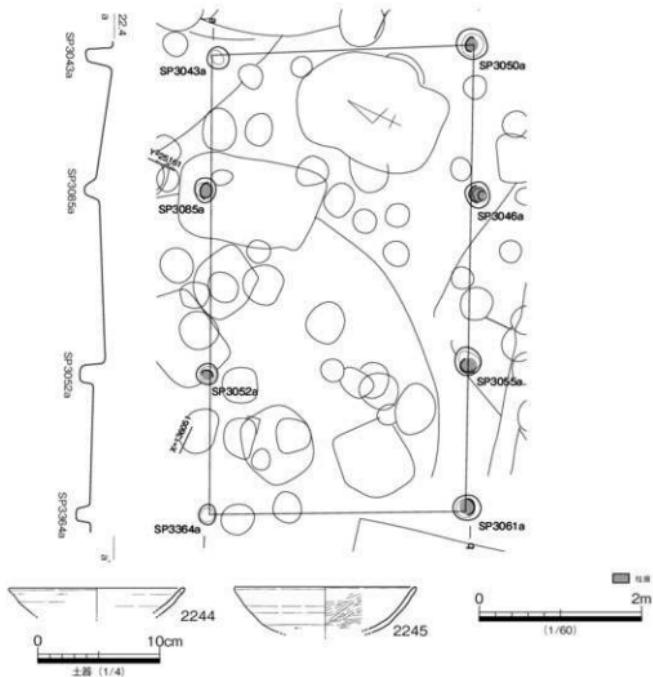




第 344 図 SB3306b 出土遺物実測図

(5) SB3383a

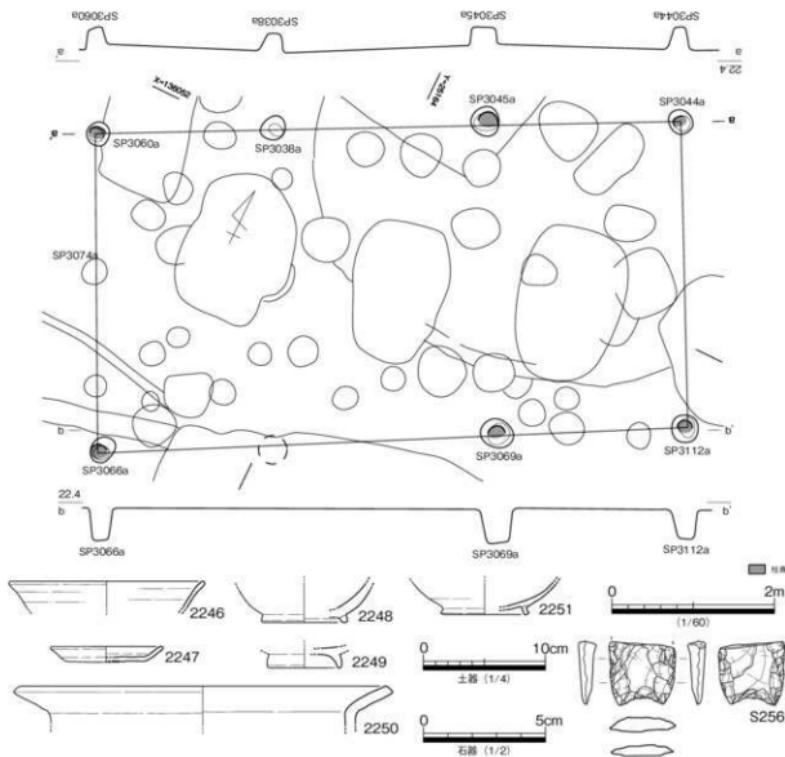
3区北西隅で検出した東西棟の掘立柱建物である。梁間1間(3.2m)、桁行3間(5.7m)の規模・構造である。建物主軸は北から65度東に偏る。土師質土器碗、黒色土器碗が出土した。11世紀後半に属す。



第345図 SB3383a 平・断面図 出土遺物実測図

(6) SB3384a

3 区北西で検出した東西棟の掘立柱建物である。梁間 1 間 (3.8 m)、桁行 3 間 (7.2 m) の規模・構造である。建物主軸は北から 64 度東に偏る。土師質土器壺、小皿、椀、鍋、黒色土器椀が出土した。12 世紀後半に属す。なお西側梁行柱間で SP3074a を検出しており、間柱の可能性がある。S256 は基部が窄まる形態の凹基 B 式の打製石鎌である。

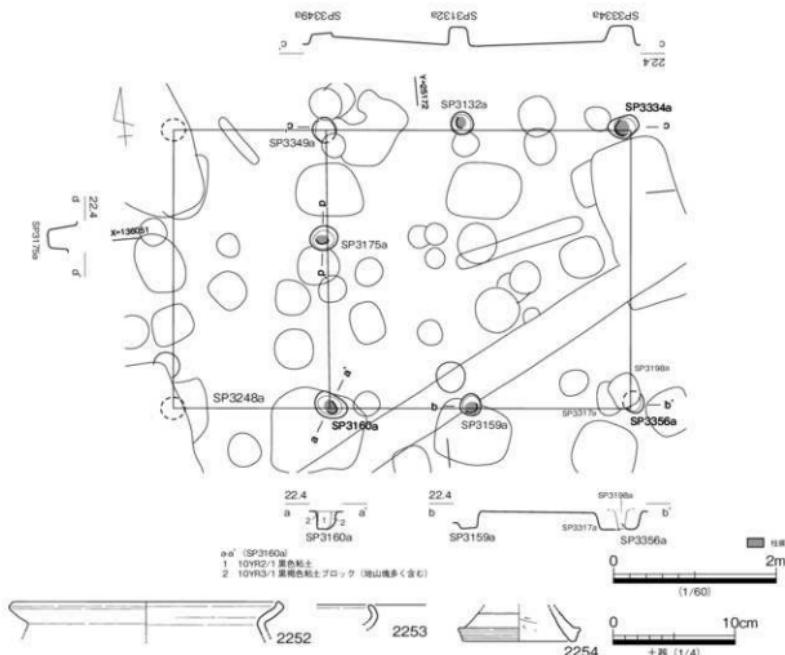


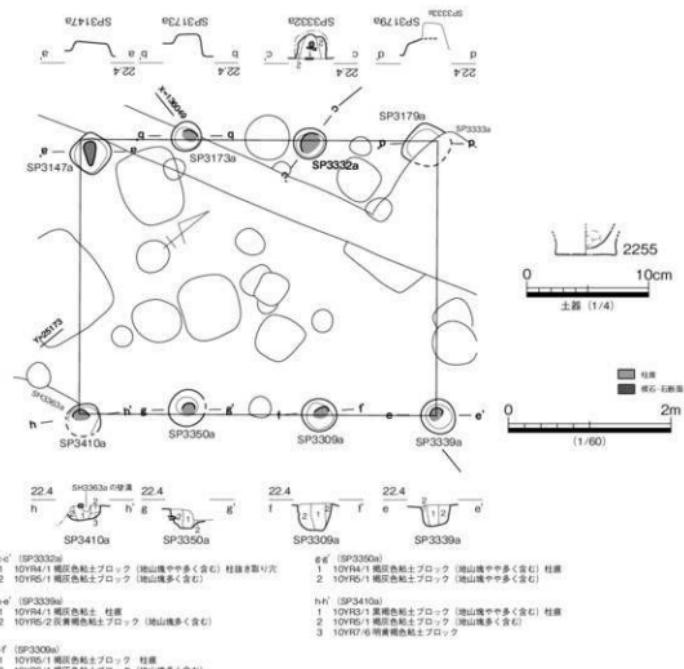
第 346 図 SB3384a 平・断面図 出土遺物実測図

(7) SB3459a

3区中央北寄りで検出した東西棟の掘立柱建物である。梁間1間(3.4m)、桁行2間(3.7m)の規模・構造だが、桁行はもう1間伸びるものと推察する。建物主軸は北から85度西に偏る。

中期後半の弥生土器が混在して出土した。





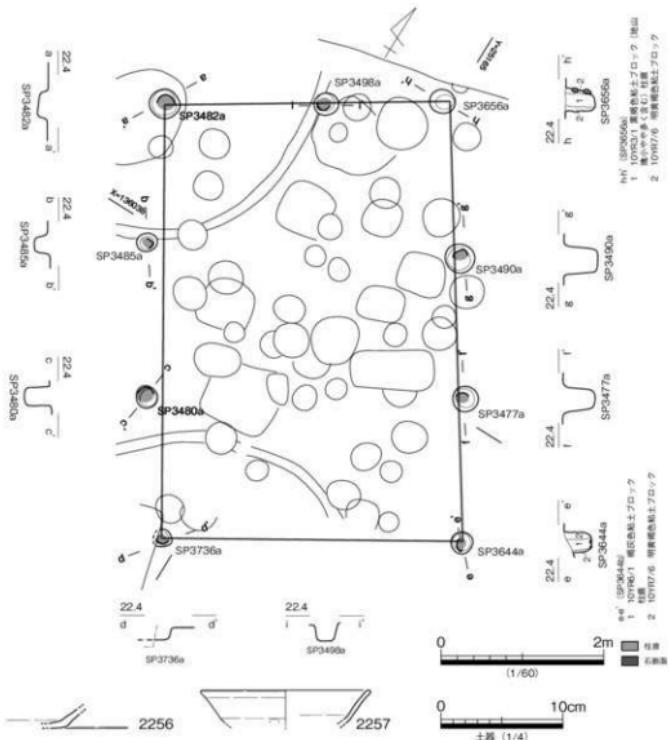
第 348 図 SB3460a 平・断面図 出土遺物実測図

(8) SB3460a

3 区中央で検出した掘立柱建物である。主軸は北から 39 度東に偏る方向である。規模・構造は梁間 1 間 (3.4 m)、桁行 3 間 (4.4 m) で、弥生土器底部が 1 点出土したのみだが、埋土の状態から古墳時代後期以後と推定した。

(9) SB3511a

3 区西側で検出した掘立柱建物である。主軸は北から 34 度西に偏る方向である。規模・構造は梁間 2 間 (3.5 m)、桁行 3 間 (5.4 m) で土師質土器坏が出土した。12 世紀前半に属す。



第349図 SB3511a 平・断面図 出土遺物実測図

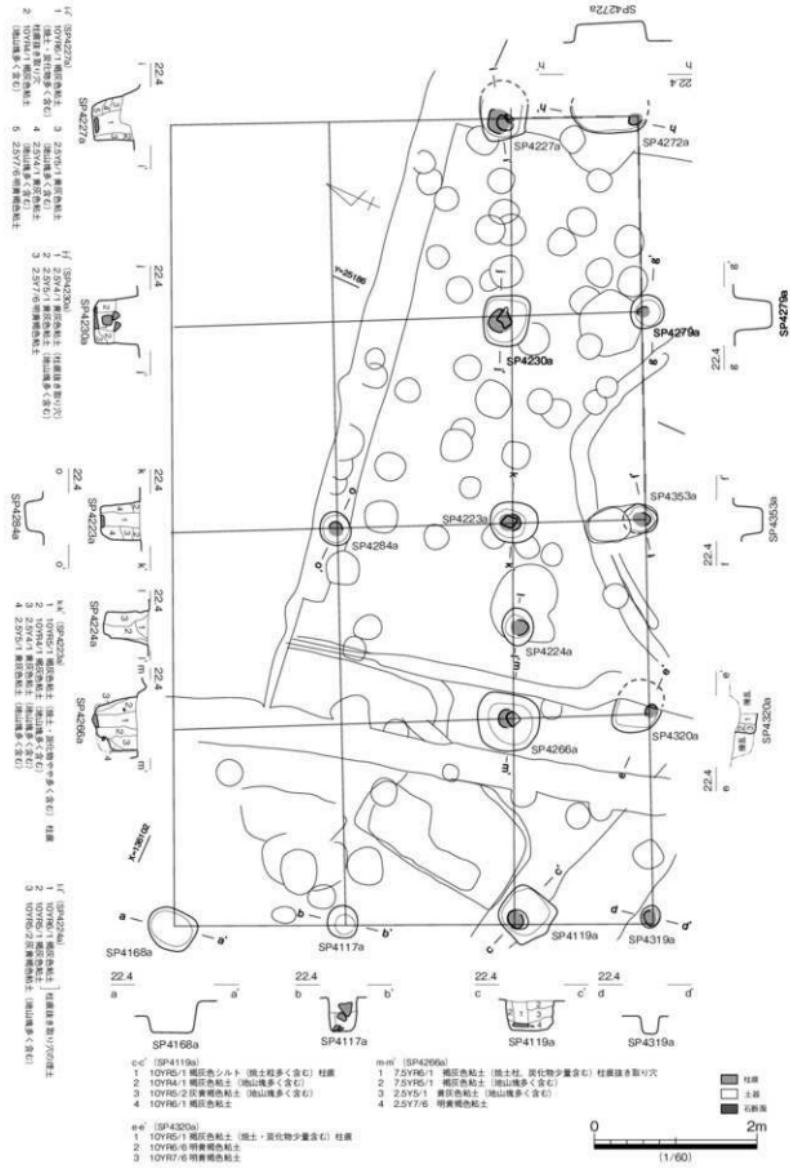
(10) SB4295a

4区東側で検出した東西棟の掘立柱建物である。主軸は北から65度東に偏る方向である。規模・構造は梁間2間(3.8m)、桁行4間(9.9m)でSP4168aを構成柱穴に含めると、梁間3間(5.9m)の構造となる。

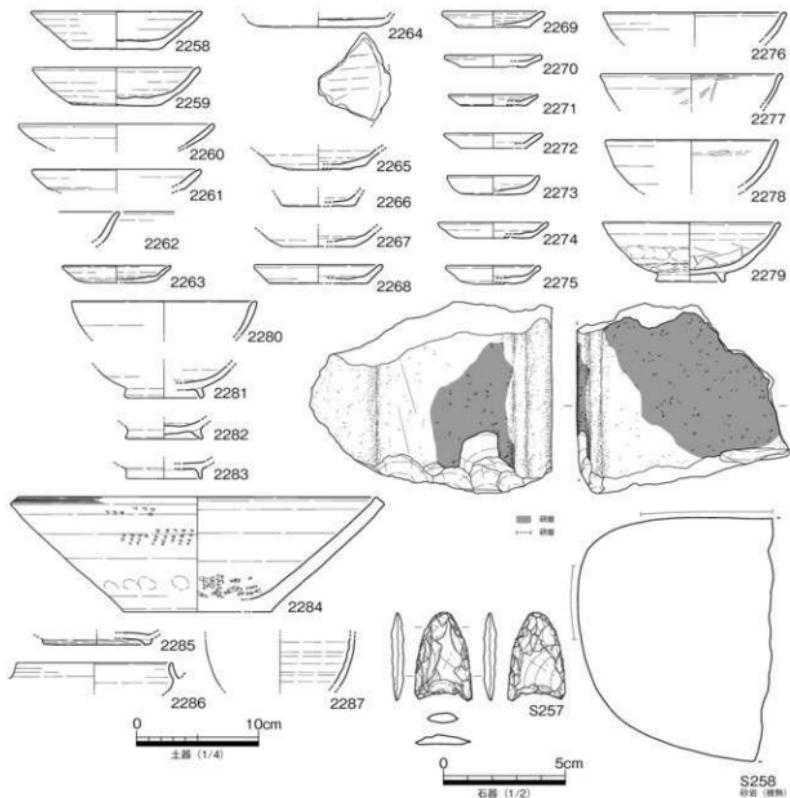
出土した遺物は土師質土器壺、小皿、椀、須恵質土器鉢、安山岩製の台石がある。土師質土器椀の高台は断面三角形で下端が外に踏ん張る形態で、13世紀に下る退化傾向の高台はない。12世紀後半に属する土器である。そのほか、古代9世紀の須恵器高台付壺、古墳時代後期の須恵器壺身が出土した。

S258は被熱した砂岩製砥石である。#1000の研磨痕を残す。S259は安山岩製の台石で表面の一部に#1000の研磨痕を残す。砥石未製品の可能性がある。

出土遺物から12世紀後半の建物と判断した。



第350図 SB4295a 平・断面図



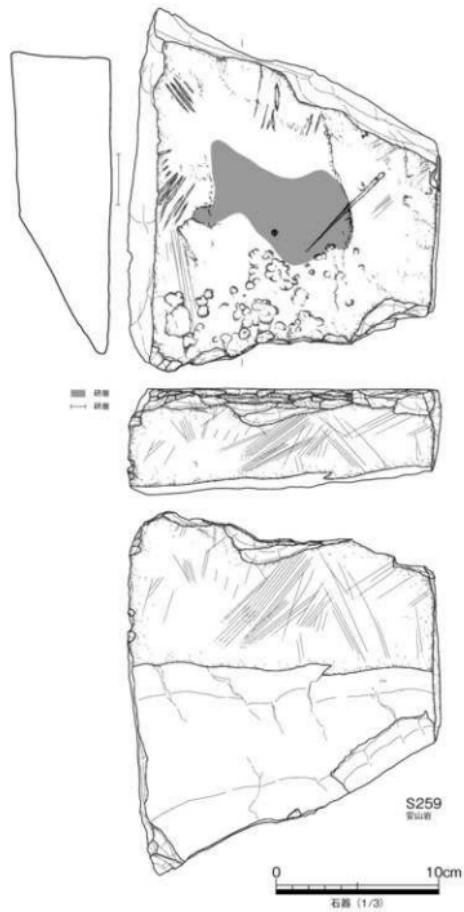
第351図 SB4295a 出土遺物実測図1

(11) SB4617a

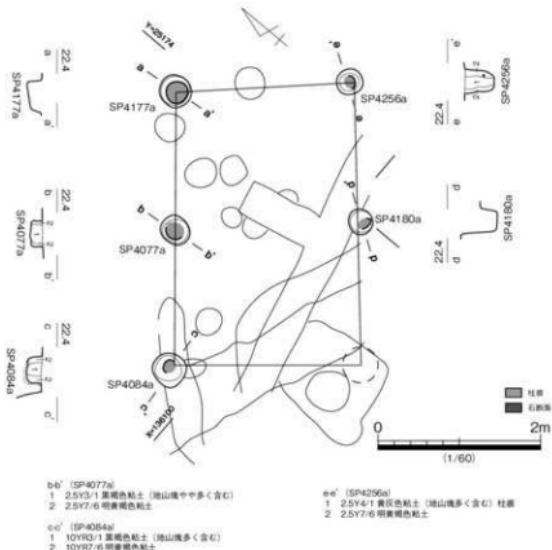
4区中央やや東で検出した掘立柱建物である。梁間1間(2.2m)、桁行2間(3.4m)の規模・構造で建物主軸は北から48度東に偏る。

(12) SB4618a

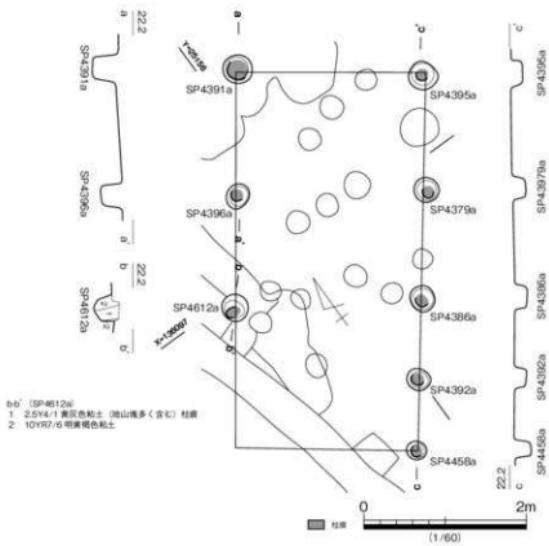
4区南西で検出した掘立柱建物である。建物主軸は北から35度東に偏る。梁間1間(2.3m)、桁行4間(4.7m)の規模・構造で出土遺物はない。



第 352 図 SB4295a 出土遺物実測図 2



第353図 SB4617a 平・断面図

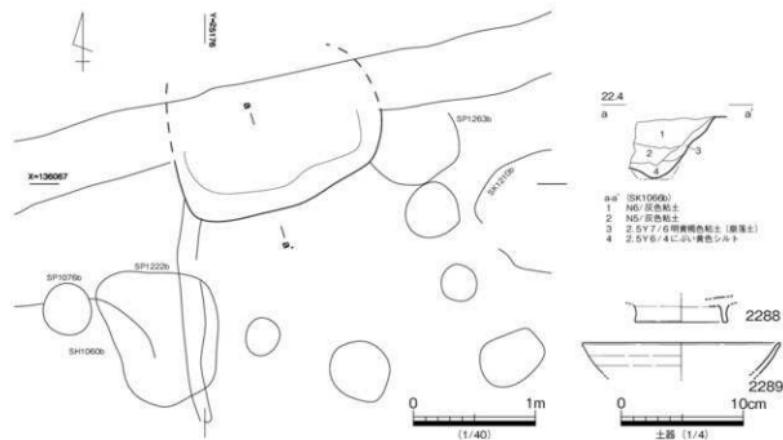


第354図 SB4618a 平・断面図

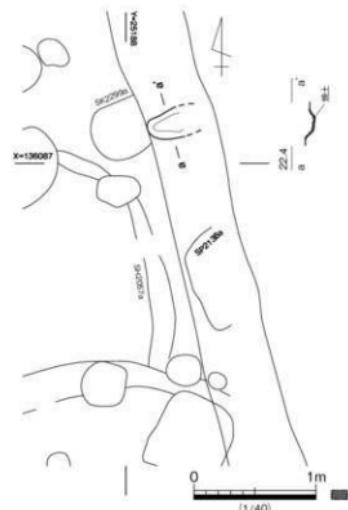
第 2 項 土坑

(1) SK1066b

1 区東北側で検出した土坑である。長軸 1.8 m、深さは 0.5 m の規模である。2288 の土師器壺は高台が高く径 7.5cm。2289 の須恵器碗は口縁部が短く外反気味に終わる。10 世紀中葉に属す。



第 355 図 SK1066b 平・断面図 出土遺物実測図



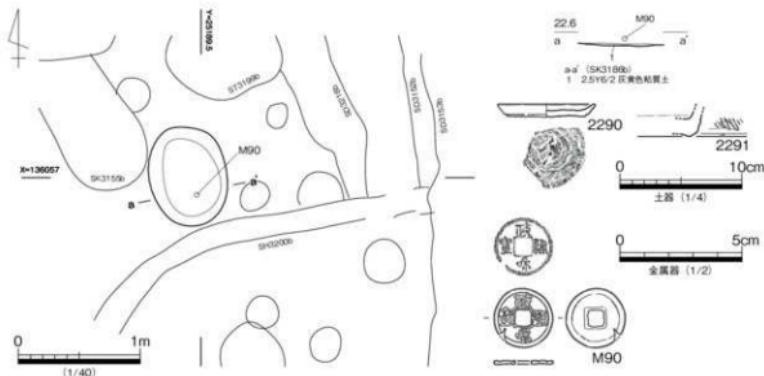
第 356 図 SK2310a 平・断面図

(2) SK2310a

2 区東端で検出した細長い土坑である。古墳時代の堅穴建物に付随する竈の可能性があるが、調査区外に本体があるため、詳細は不明である。出土遺物はなかった。SK335b にも同様の遺構があり、今回報告する範囲の東外側に古墳時代の堅穴建物が所在する可能性がある。

(3) SK3186b

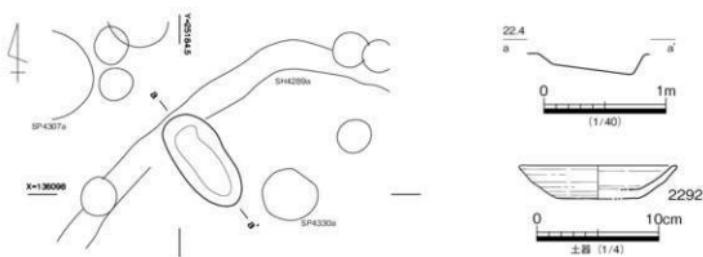
3 区北東側で検出した梢円形土坑である。長軸 0.82 m、短軸 0.65 m で浅い。13 世紀後半の土師質土器小皿と北宋銭である「政和通宝」が出土した。



第357図 SK3168b 平・断面図 出土遺物実測図

(4) SK4231a

4区東側のSB4295aの構成柱穴SP4353aに接する位置で検出した土坑である。記録では別の遺構としているが、柱抜き取りの痕跡と考えられ、出土した土師器2292は建物SB4295aの出土遺物と同じ時期である。



第358図 SK4231a 平・断面図 出土遺物実測図

第 3 項 溝

(1) SD1010c

1 区東側ではほぼ条里方向に走行する溝である。口縁部が短く外反する和泉型瓦器椀と須恵質土器鉢口縁が出土した。12 世紀後半の遺物である。

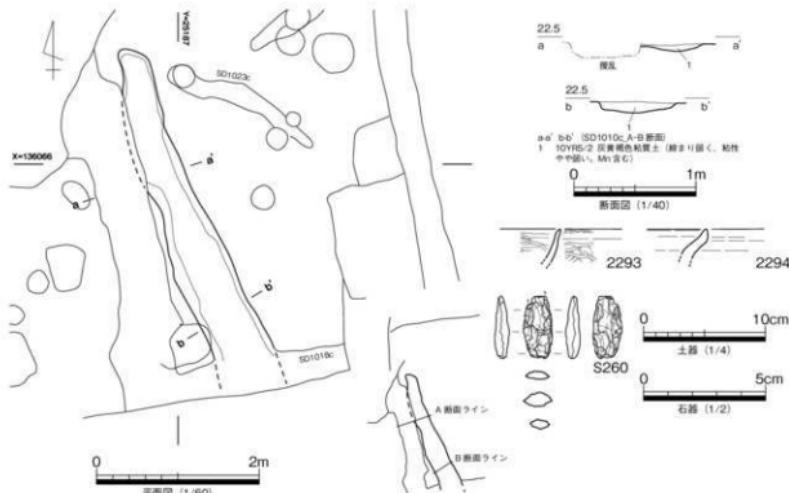
(2) SD1016c

1 区東端で検出した大規模な溝で西へは溝が途切れる条里方向の溝である。溝幅 22 m、深さ 0.68 m で数回にわたって埋めた痕跡が断面図から読み取れる。

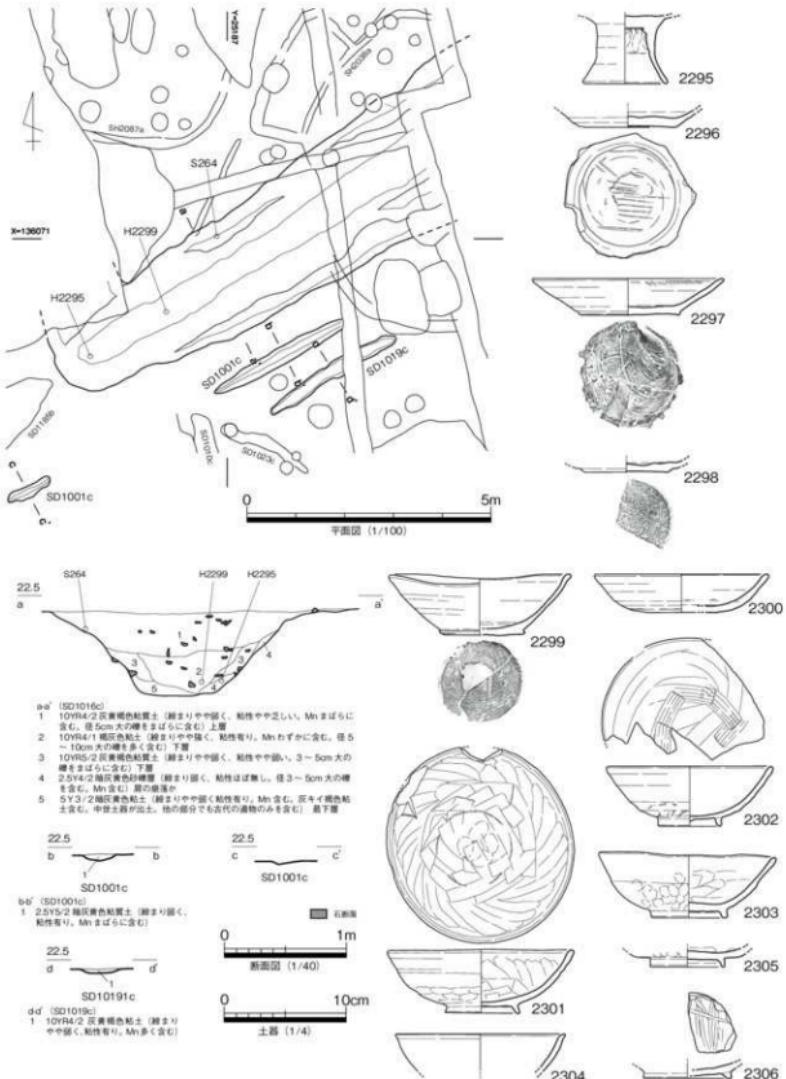
出土した土器は土師質土器出現期の瓦器の坏・椀・黑色土器椀・須恵質土器等がある。

2295 は 12 世紀後半の器台。2297 ~ 2299 は底部糸切りの痕跡が明瞭に残る。2301 ~ 2303 の土師質土器椀は高台の下端が外へ踏ん張る形態を有し、12 世紀後半に属す。2307 ~ 2309 の瓦器は和泉型で高台が退化傾向にあり 13 世紀に下る。2313 ~ 2316 の須恵質椀も高台の退化により 13 世紀前半に下る。

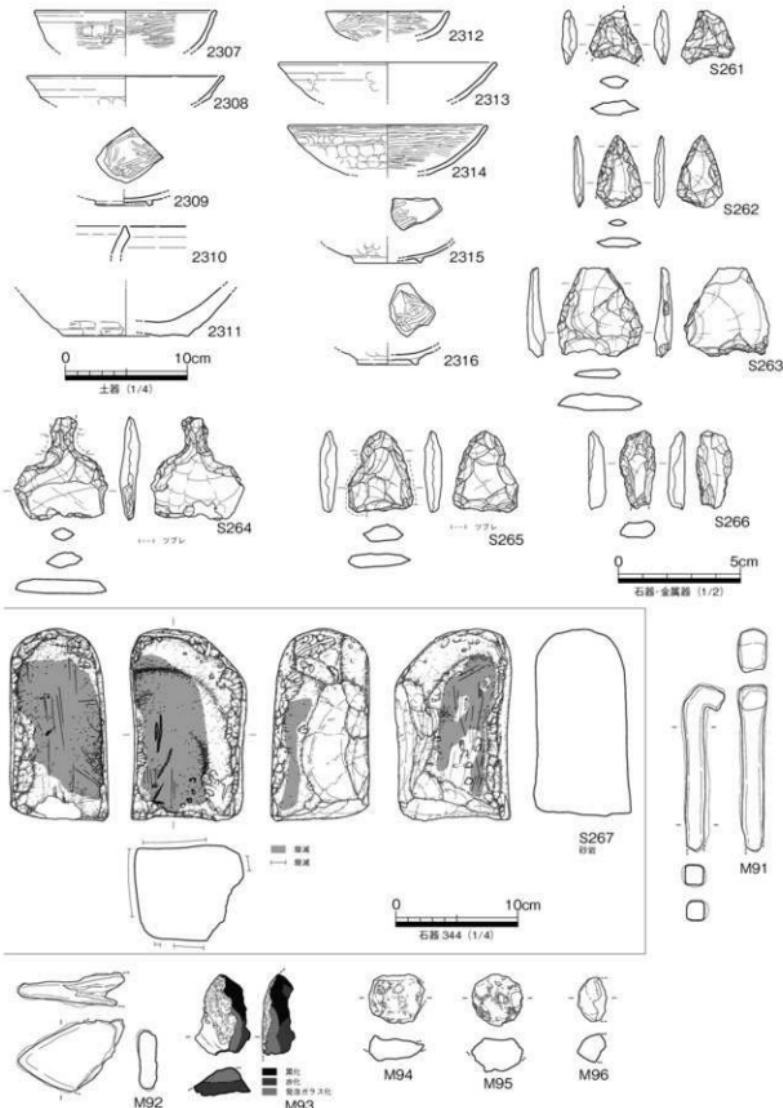
S261 ~ S265 はサスカイト製石鎌、S264・S266 は石錐である。S267 は砂岩製砥石で紙面が 4 面ある。M92 は板状鉄片で厚みがあり、一部で表裏に剥離するよう見える。M93 は輪の羽口の破片である。近辺で古代以後に金属器を製作していたものと推察する。M94 ~ M96 はそれを示す小形の鉄滓である。炉底の径が数 cm という最小級の炉が想定できる。M91 は鉄釘である。



第 359 図 SD1010c 平・断面図 出土遺物実測図



第360図 SD1016c 平・断面図 出土遺物実測図



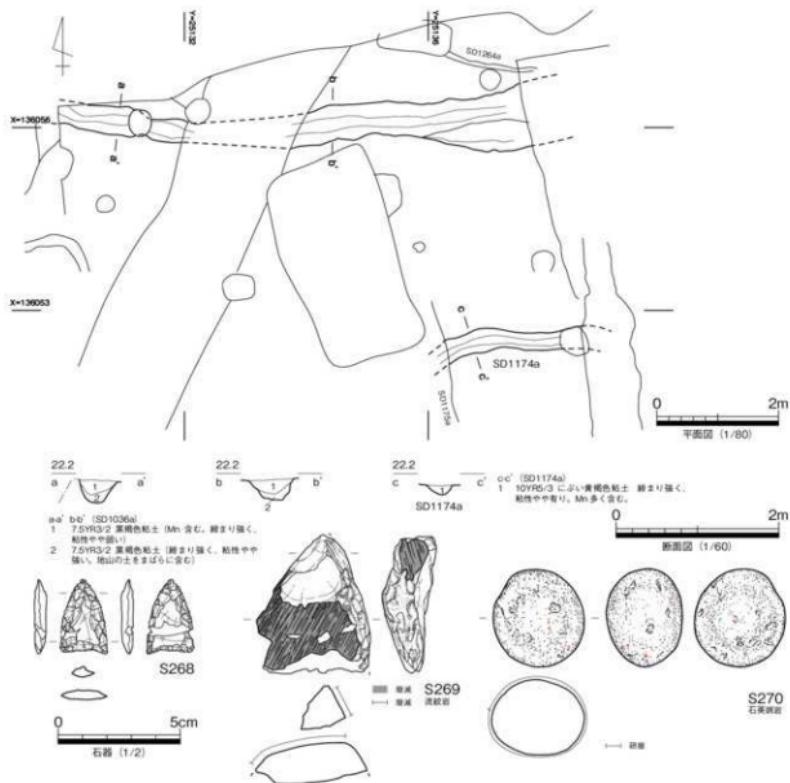
第 361 図 SD1016c 出土遺物実測図 2

(3) SD1036a

1区西側で東西方向に走行する溝である。弥生時代のすべての遺構を切ることから、古墳時代後期以後の遺構と位置付けたが、土器は出土せず石器のみ出土した。

S268はサスカイト製の打製石鎌、S270は花崗斑岩による磨石である。全面に強い研磨がある。S269は流紋岩製の砥石である。2方向に平滑な研磨面が残る。

なお、南に3mほど離れて同一方向の溝SD1174aがある。これも遺物は出土していない。両溝とも古代において周辺が農地化した際の溝かもしれない。



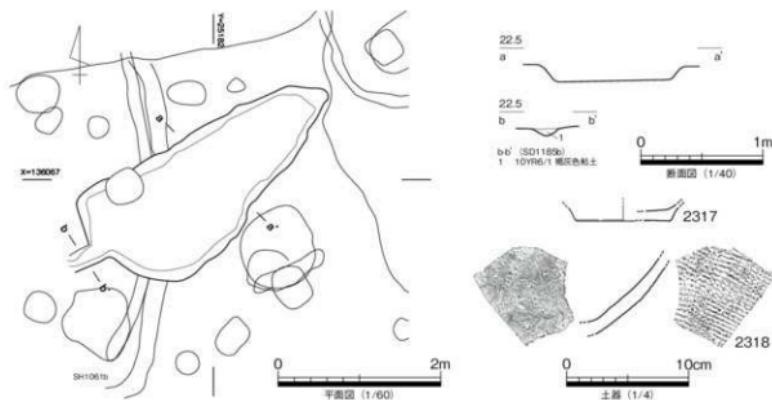
第362図 SD1036a・SD1174a 平・断面図 出土遺物実測図

(4) SD1185b

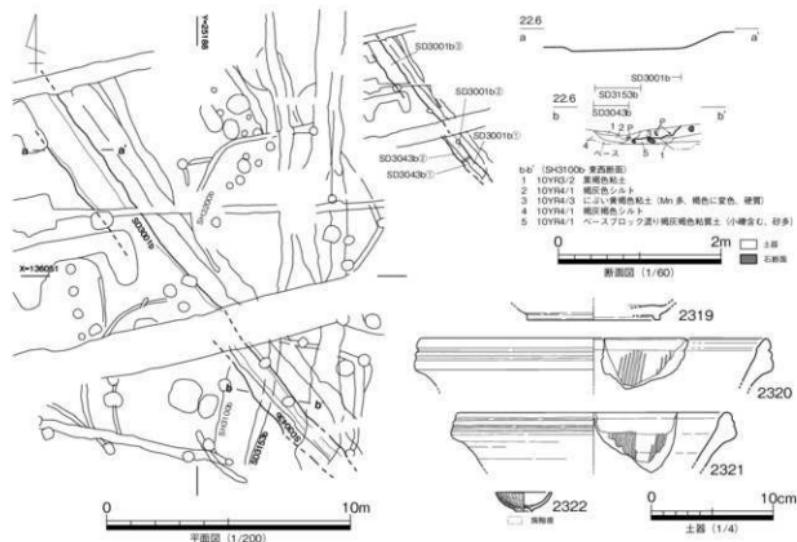
SD1016c に接続する位置にある条里方向の不定形溝である。古代の土師器壊、須恵器甕が出土した。

(5) SD3001b

SD4002a と重複する条里方向の溝のうち、最上部に位置する溝である。近世の陶磁器が出土した。



第363図 SD1185b 平・断面図 出土遺物実測図



第364図 SD3001b 平・断面図 出土遺物実測図

(6) SD3002b

3区南東隅で検出した大形の溝である。旧練II報告のSD19から接続し、旧練VII報告のSD2020に統く溝で、大局的にみると、本調査区の微高地範囲を中心に、その南縁を取り巻くように弧を描いて走行する。溝幅205m、深さ80mで断面逆台形を呈す。

弥生土器が多く出土しているが、少量の2324～2326の7世紀後半代の須恵器の出土により、埋没時期は7世紀後半と判断した。

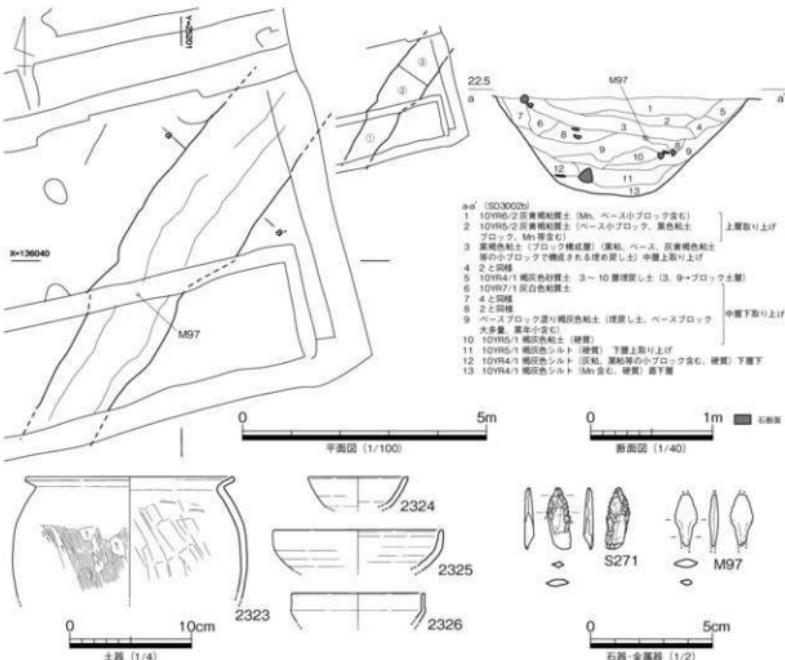
M97は小形の連鉄式銅鏡である。

(7) SD3042b

SD4002aと重複する条里方向の溝の一部である。土器は出土していないが、石錐1点と断面が正円の鉄釘が出土した。近世以後の流路と推察する。

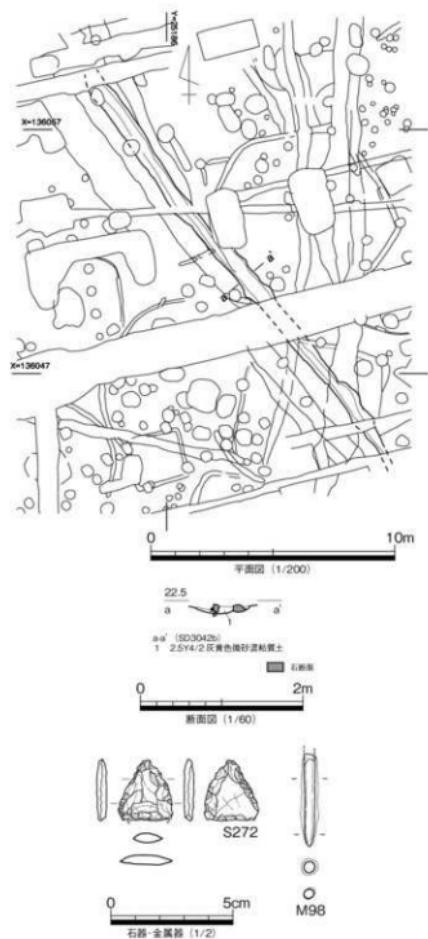
(8) SD3117b

SD3151bから分岐する小流路である。溝幅0.3～0.5mで浅い。2327の広口壺と2328の口縁部に刻目を施す支脚は後期前半新段階に位置づけられる。S273は流紋岩の板石を方柱状に分割した礫から砾

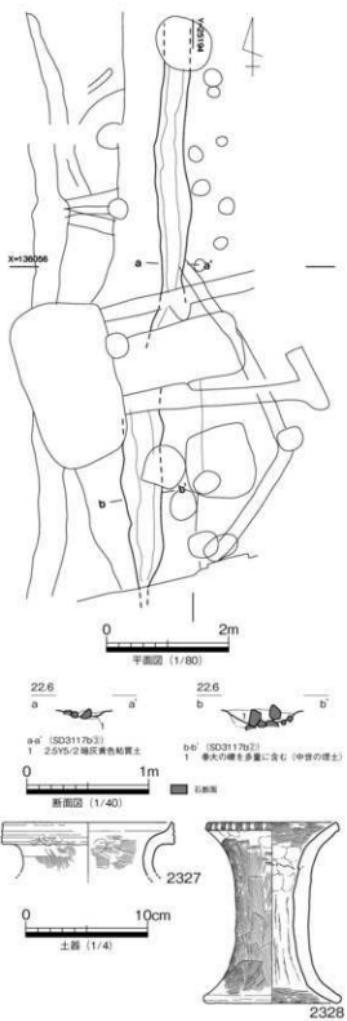


第365図 SD3002b 平・断面図 出土遺物実測図

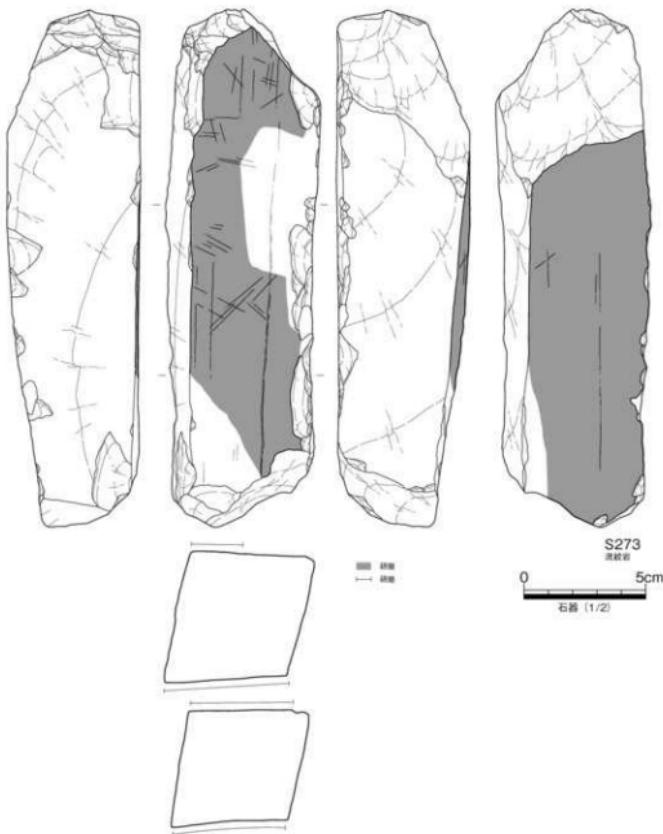
石を製作した大形の砥石である。分割面を除く 2 面に顕著な研磨痕が残る。いずれも # 4000 の平滑度を有す。



第 366 図 SD3042b 平・断面図 出土遺物実測図



第 367 図 SD3117b 平・断面図
出土遺物実測図



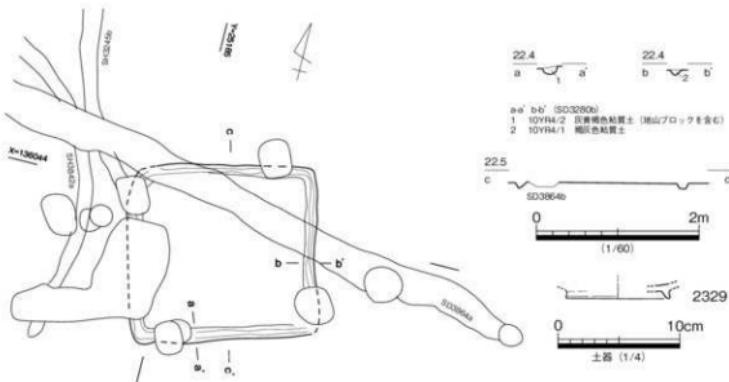
第368図 SD3117b出土遺物実測図2

(9) SD3280b

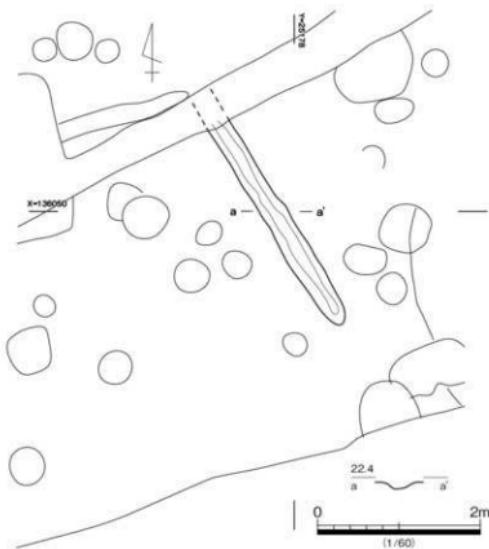
3区中央付近で検出した方形周溝状の溝である。溝幅0.15mの小規模な溝で、一辺2mの正方形の範囲を区画する。一見竪穴建物にも見えるが埋土は弥生時代の暗褐色系ではない。黒色土器が出土していることから、古代末ごろに位置づけられる。

(10) SD3308a

3区中央付近で遺構密度がやや希薄な箇所で検出した条里方向の小溝である。古代に所属するすき溝の一つであろう。出土遺物はなかった。



第 369 図 SD3280b 平・断面図 出土遺物実測図



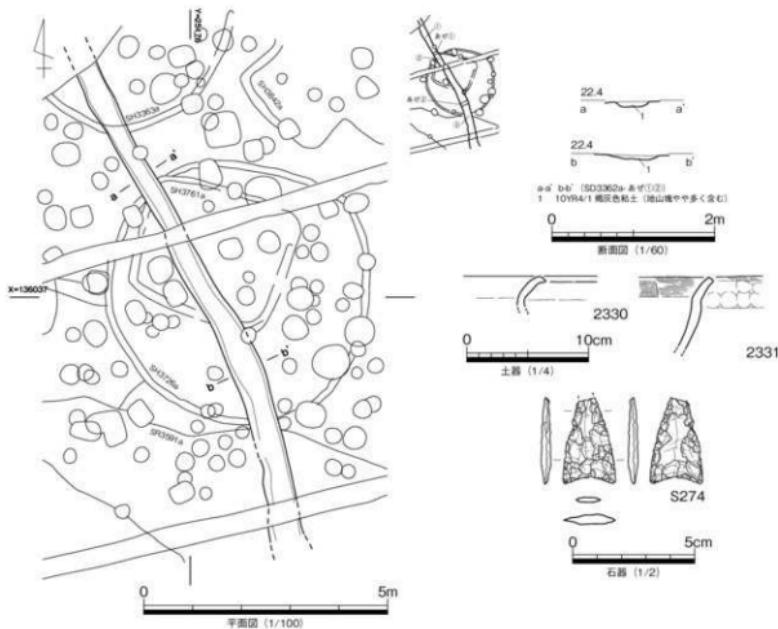
第 370 図 SD3308a 平・断面図

(11) SD3362a

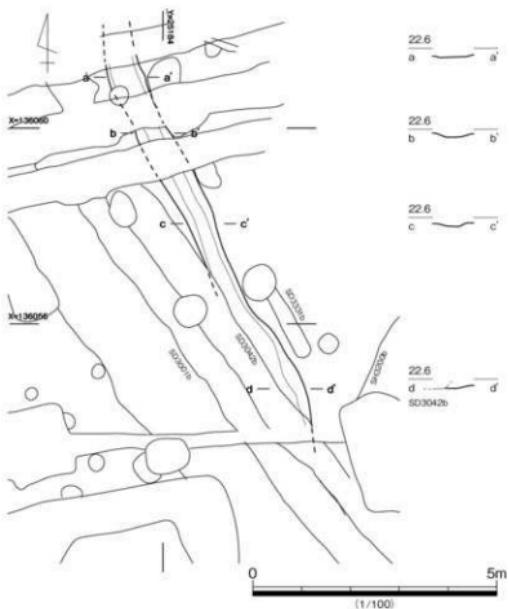
3区中央付近を条里方向に走行する溝である。古代に所属するすき溝の一つであろう。弥生時代遺物のみ出土した。

(12) SD3423a

SD4002aと重複する条里方向の溝の一部である。土器は出土していない。



第371図 SD3362a 平・断面図 遺物実測図



第 372 図 SD3423a 平・断面図

(13) SD4002a

今回の調査区東側を条里方向に走行する同一箇所で複数の流路で構成される溝群である。遺構図においてトーンで示したのが最上層の流路で、4 区中央で西に直角に分岐する溝を伴う。それに切られて、主にその西側に下層から上層に至る規模の大きな溝群の本体がある。

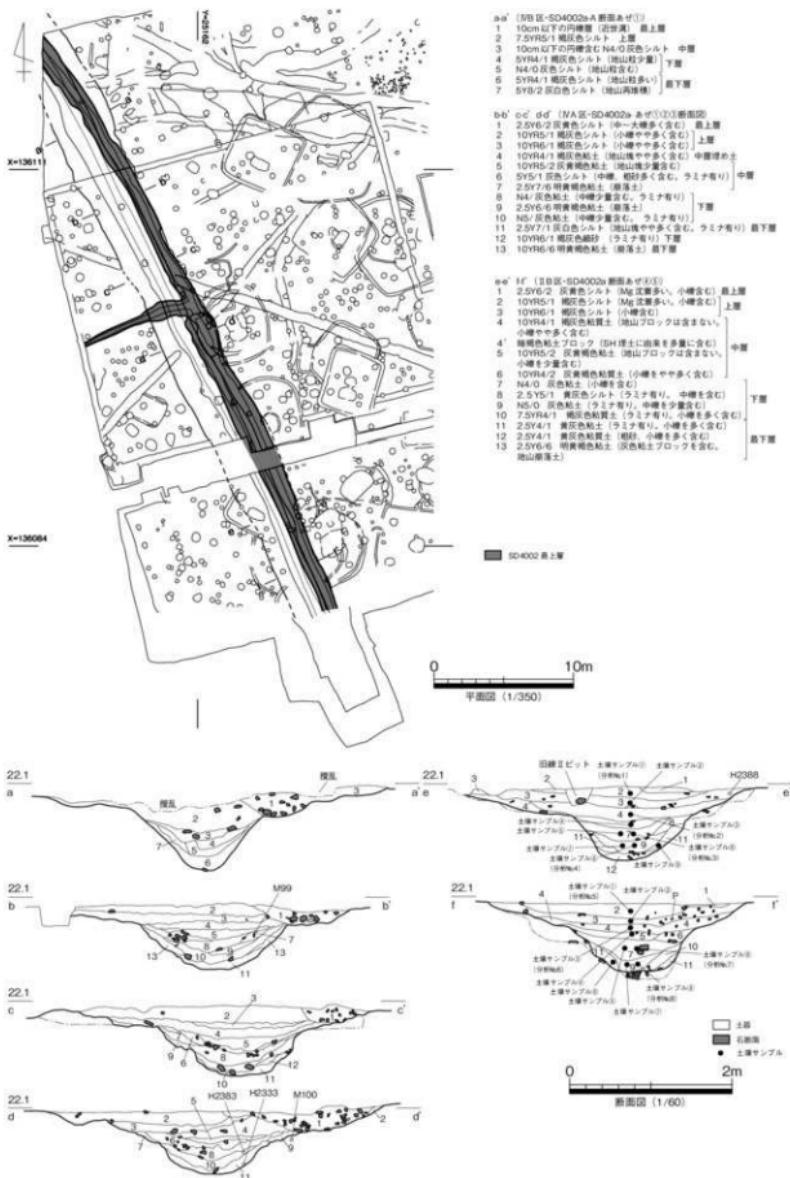
溝群の幅は上端で 3 m、半ばで 1.5 m、断面形は逆台形状を呈す。埋土は下層及び中層が数単位に分かれ、砂性の土壤で埋没する。上層は褐色系の埋め戻し土で、大規模な掘り直しを伴わないまま上層まで堆積して一旦埋没した後、最上層のみ流路をがらして再掘削した痕跡が残る。

下層から上層までの層別試料で花粉分析を行った結果、ヨモギ属が繁茂し比較的乾燥した環境が下層から上層まで継続することが判明した。

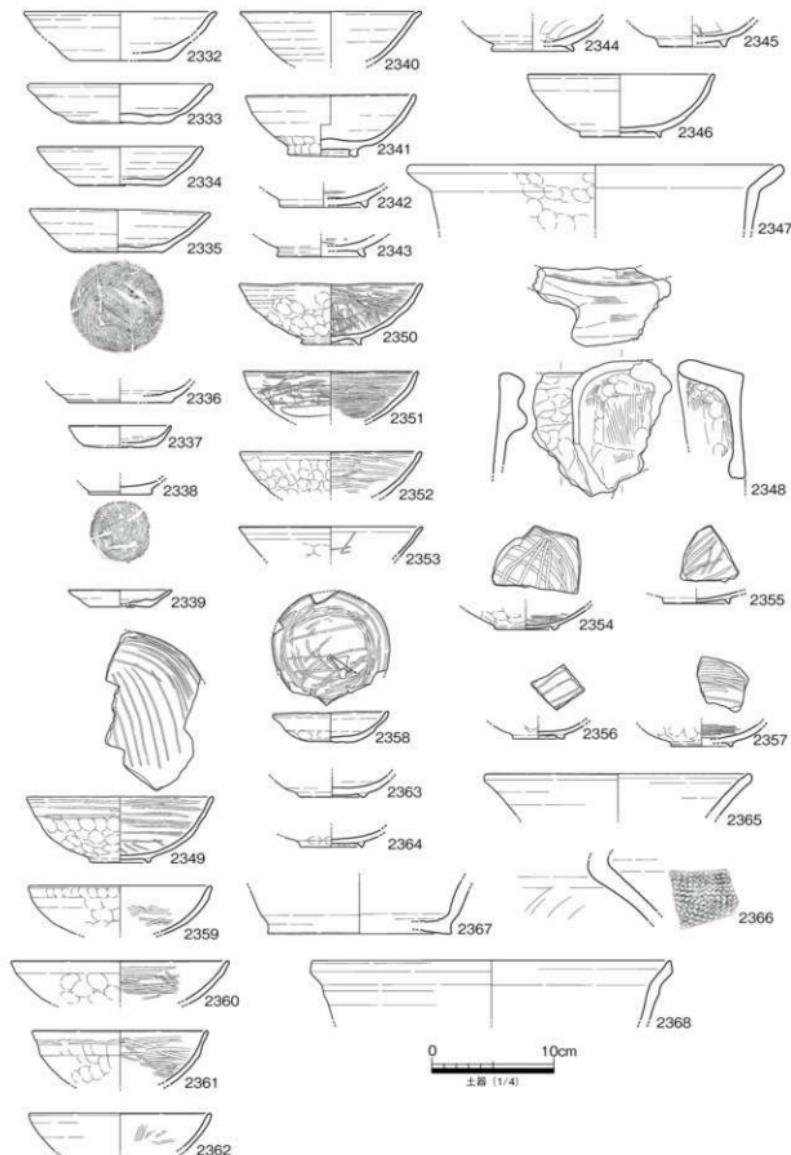
土師質土器椀は高台が矮小化した 12 世紀後半から 13 世紀前半のものが目立ち、下層には瓦器椀が多く、中層には須恵質椀が目立つ。白磁は IV 類の碗が下層からみられる。近世に下る染付碗 2378 や陶器皿 2379・2380 等一部層位の混乱がある。最上層とした層位は近世と見るべきである。

数少ないが平瓦が出土した。2381 は縱方向の縄目タタキを施す 11 世紀ごろの平瓦片、2382 は斜方向に粗縄目タタキを施す 12 世紀ごろの平瓦片である。

なお、本条里溝は旧練兵場道路 II 報告の調査区を斜めに走行する条里溝 SD01 が南から北へ流下した後、一旦東西方向の条里溝 SD17 と交差して途切れ、やや東にずれて今回の調査区内で SD4002a として再び現れて北に伸びるもので、12 世紀から 13 世紀にかけて、この一帯の条里景観を示す重要な資料である。

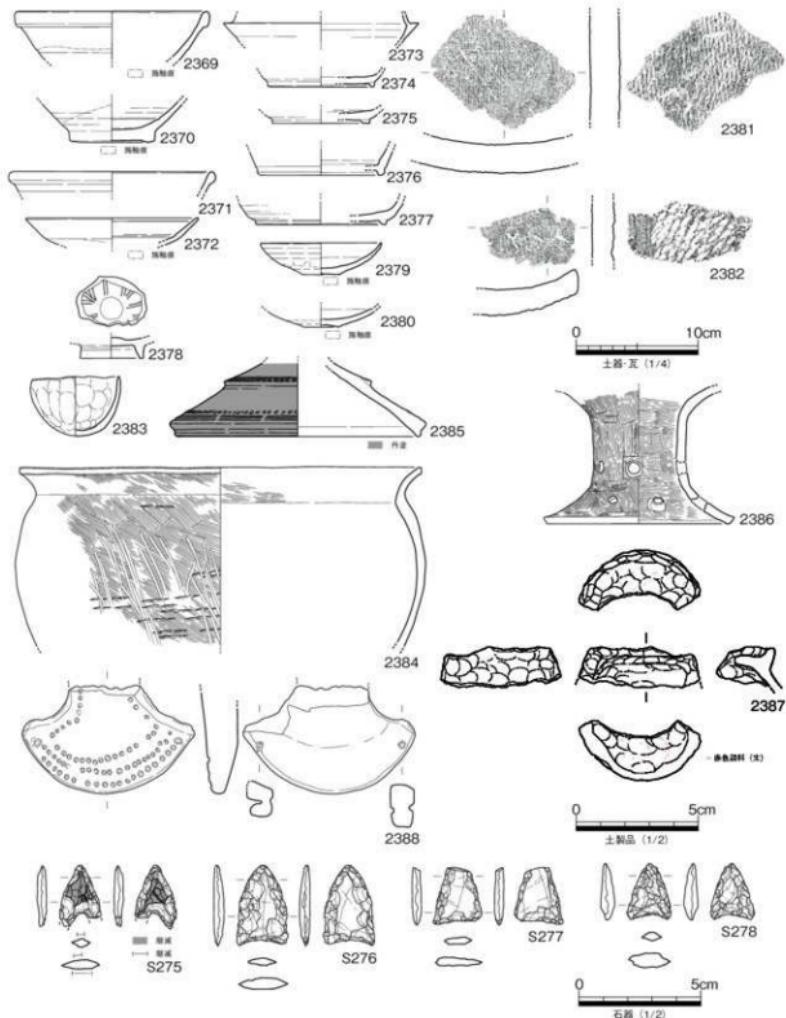


第373図 SD4002a 平・断面図

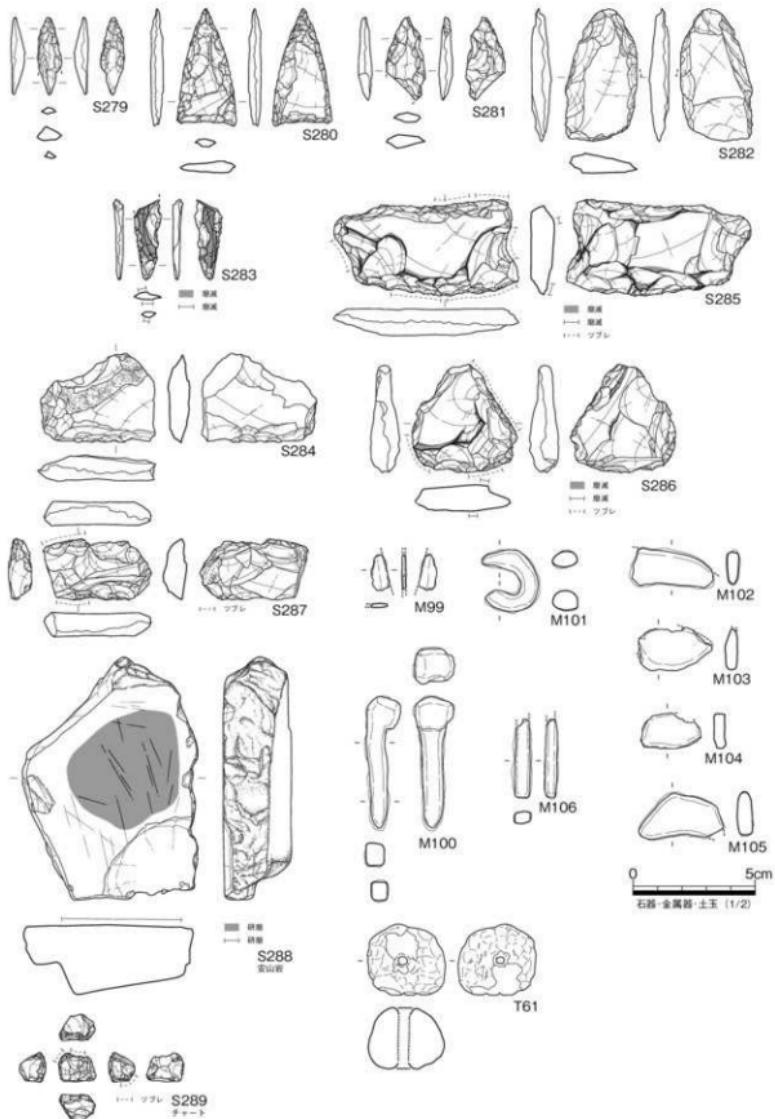


第 374 図 SD4002a 出土遺物実測図 1

久安元年（1145）に製作された詳細な土地台帳である宮内庁書陵部所蔵「讃岐國善通曼荼羅寺領注進状」（書陵部所蔵文書 平安遣文2569）に記載された範囲は、現在の善通寺東院伽藍を起点としてみると、この一带に比定されることは間違いない。本溝SD4002aはこの文献と善通寺本堂の位置関係に依拠すれば、多度郡条里の四条八里十三坪（東側）と十四坪（西側）を区切る縦方向の坪堀溝として12世紀



第375図 SD4002a 出土遺物実測図2



第 376 図 SD4002a 出土遺物実測図 3

中葉ごろの土地利用が記載された文献記録との対比が可能となる。

文献では坪堺溝の東側となる十三坪に、「現作水田」の面積が周りと比べて多く記載されている。その坪では平成8・9年度調査を行った現看護学校の調査区で大規模な河川埋没低地が検出されており、その坪が主に水田として利用されていた可能性が高いことと符合する。一方で、文献には周囲の坪に現作水田はほとんど見られない。もっぱら現作・年荒の「畠地」としての土地利用が行われていたように記されている。この記載は、発掘調査及び上記の溝理土の自然科学分析において「遺構の自然埋没が低調で、周辺がもっぱら高燥環境にあったと推定できる」とことと符合する。このように発掘調査と科学分析による結果が文献に記載された内容と概ね一致することは大変興味深い。

そのほかの出土遺物を提示しておく。2383は脚部に段や突帯に絡めて刺突文や櫛描文を施し、赤色顔料（ベンガラ）を外面に塗布して焼成した備中地域の丹塗装飾高杯である。2387は把手付広片口皿の把手部片で、内面及び把手部に朱が付着する。

2388は中形の分銅形土製品である。刺突文で装飾し下端は器壁を薄く仕上げる。

S275～S280は凹基・平基式のサヌカイト製打製石錐である。S280は中でも長さ4.9cmと大形である。S282はそのような大型石錐の未製品。S283はサヌカイト製打製石錐である。素材面が磨滅し石庖丁の転用品である。S285はサヌカイト製打製石庖丁である。上下縁に稜線の潰れがあり楔状石核に転用されたものである。S284～S287は楔状石核である。M99は連鉄式銅錐の刃部小片である。M101～M105は棒状・板状の鉄片である。T61は土玉である。以上の遺物は形状等から見て弥生期の混在品である。そのほか、M100の鉄釘、S288の安山岩製の砥石。S289の青色チャートの火打石は、本遺構に伴う遺物と考えられる。

(14) SD4028a

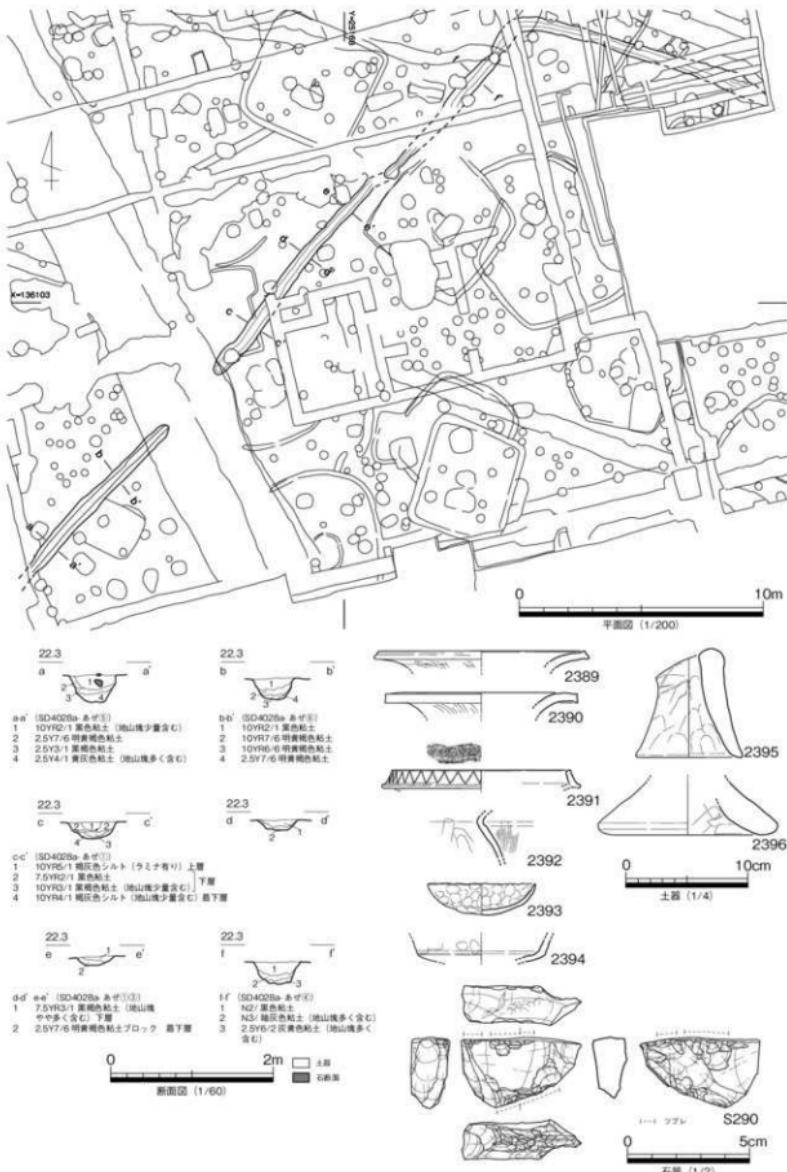
4区南西隅から30m北東方向に直進し、約120度屈曲して南東方向に直進する溝である。幅0.5m、深さ0.3mを最大とし、溝底レベルは南西端のaラインと屈曲部付近のfラインとの間で差がなく、中间のc・dライン付近でやや浅い。

埋土には地山塊を含む粘土層が堆積し、意図的に埋め戻した形跡を認める。堆積土中に砂性土を含まないことから、流瀬水環境ではなく高燥環境で機能し、廃絶した遺構と推察する。

弥生時代のすべての遺構を切り込んで掘開することから、古墳時代以後の遺構と判断したが、出土遺物は弥生時代終末期以前のものに限られ、遺構の所属時期は明らかでない。

2391はヘラ描きの単線による山形文を施す複合口縁壺で西部瀬戸内の影響を受ける搬入系土器である。2393は手づくね成形の小形鉢で古墳時代前期に下る可能性もある。

S290は打撃分割したサヌカイトの厚みのある剥片を縦に使い、細長い石刃を剥取した楔状石核である。旧石器・縄文時代の継長剥片石核に類似するが、風化はあまり進んでいないことから、弥生時代に属するものと考えられる。



第 377 図 SD4028a 平・断面図 出土遺物実測図

(15) SD4034b

4区北西隅で後述のSD5004から分岐して始まり、南東から北西に向けてやや南に弧を作りながら走行し、調査区外に延びる溝である。溝幅は1~2mで深さは検出面から0.1~0.17cmと浅く、溝底のレベルは分岐部が深い。側面の立ち上がりは極めて緩やかで自然傾斜に近く、灰色系のシルト層で埋没することから、穏やかな埋没環境が想定できる。

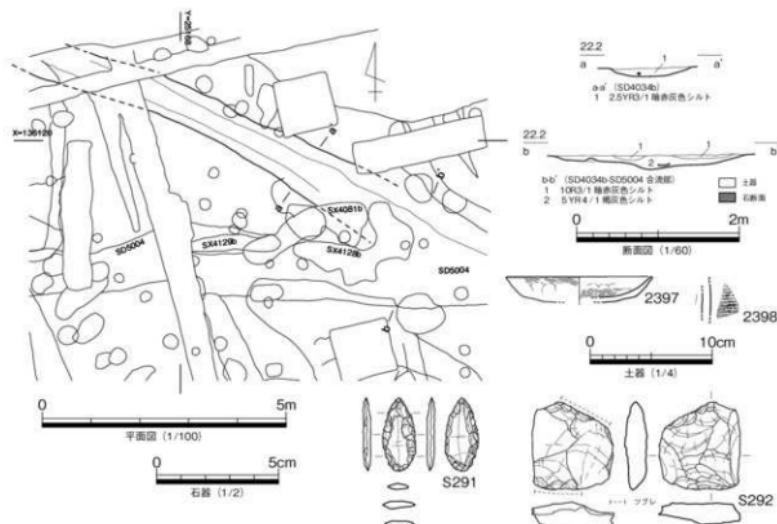
2397は土師器の坏である。弥生時代の小皿の系譜上にあり、手づくねで成形する古墳時代前期の皿である。2398は須恵器壺片である。S291・S292は弥生時代混在の石器である。

須恵器が出土することから古墳時代後期以後の遺構である。

(16) SD4088b

4区北端で検出した浅い溝である。前溝SD4034bから北東方向に1.8m離れて約2m並走し、東端で北に屈曲する。並走部の溝幅は0.45m、屈曲部の溝幅は約1mに広がる。深さは検出面から0.1mに満たない。

出土遺物はすべて弥生土器だが、SD4034bと並走することから古墳時代後期以後でSD4034bと同じ時期に使われた溝と考えられる。

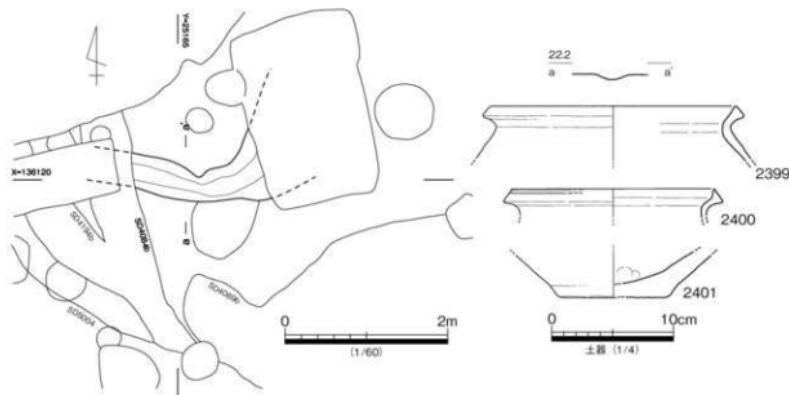


第378図 SD4034b 平・断面図 出土遺物実測図

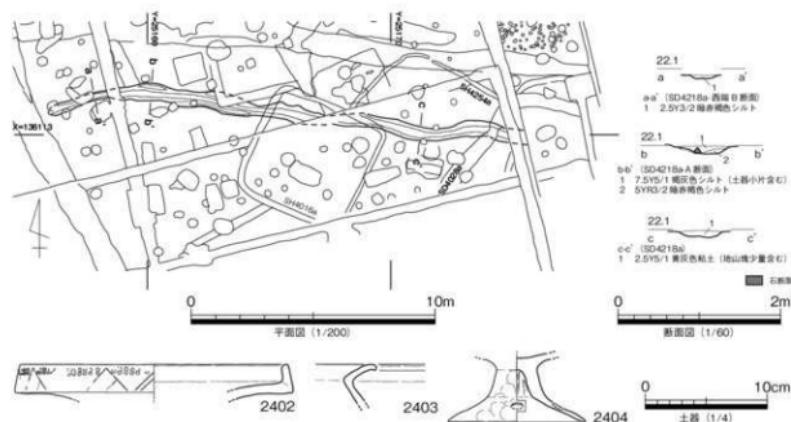
(17) SD4218a

4 区北側で後述の溝 SD5004 の南 2.4 m を並走する溝である。溝幅は 0.3 ~ 0.7 m で深さは検出面から 0.1 m に満たない。灰褐色系シルト層で埋没しており、穏やかな堆積環境が想定できる。SD5004 の溝輪郭が西端で僅かに屈曲する形態に運動して本溝も屈曲することから、両溝は同時期に存在した溝と判断できる。また両溝に挟まれた部分には幅 2.4 m の通路状構造物が存在した可能性も考えられる。なお条里方向の溝 SD4002a に切られることから古代までには埋没した遺構である。

出土遺物は弥生土器のみだが、SD5004 から分岐する溝 SD4034b で須恵器が出土していることから古墳時代後期以後に属する遺構である。



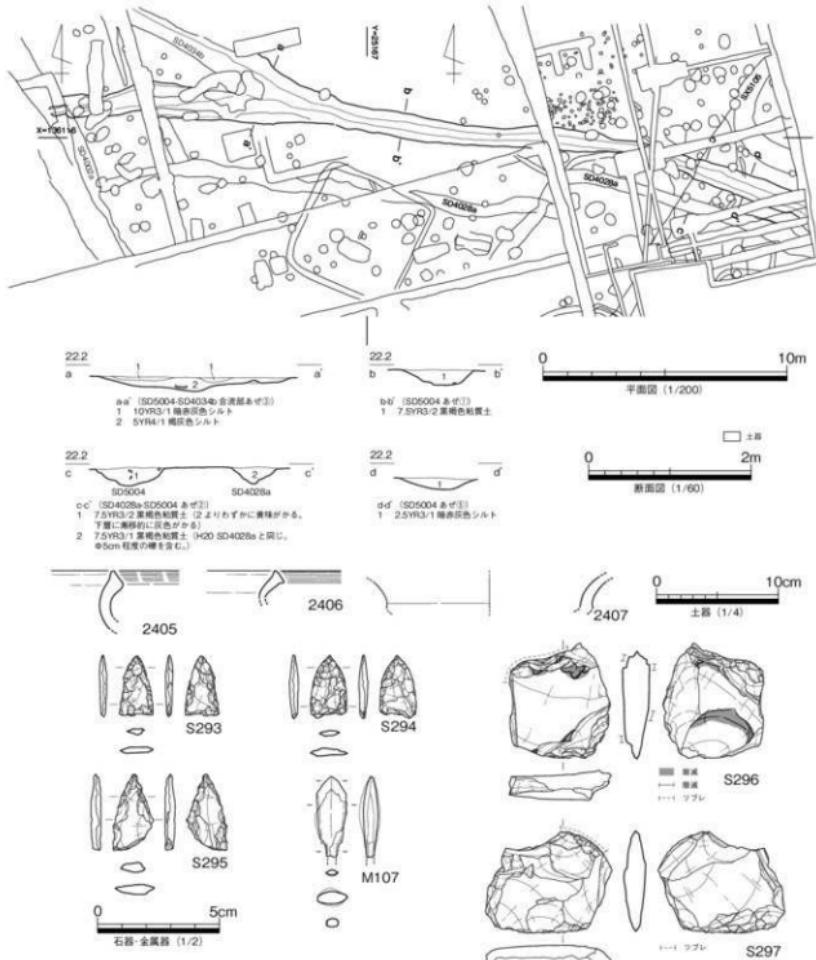
第 379 図 SD4088b 平・断面図 出土遺物実測図



第 380 図 SD4218a 平・断面図 出土遺物実測図

(18) SD5004

4区・5区の北側を南東から北西に向けて走行する溝である。溝幅は0.8~0.9mで深さは検出面から0.2m。SD4034bとの分岐部のみ溝幅が2.3mに広がる。検出範囲の東西側は灰色系のシルト層、中央部は黒褐色粘質土を埋土とし穏やかな堆積状況が想定できる。西側は先述のSD4218aと並走し、西端で条里溝SD4002aに切られる。東側はSD4028aの屈曲部以東に並走する。出土遺物はすべて弥生時代遺物の混在である。そのうちM107は主頭形有茎鉄鎌である。茎部下端を折損する。

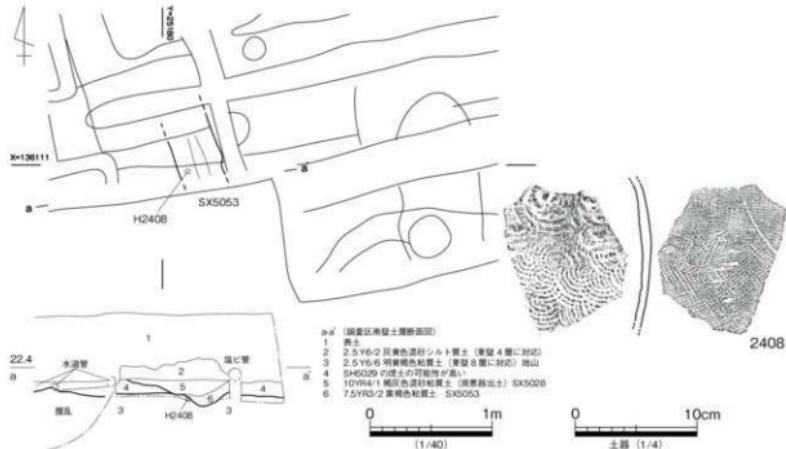


第381図 SD5004 平・断面図 出土遺物実測図

第4項 不明遺構

(1) SX5028

5 区中央南端で検出した溝状の落ち込みである。弥生時代の堅穴建物 SH5029 の埋土を切り込み黒褐色粘質土で埋没する。検出範囲が狭小で平面的な広がりが不明だが、埋土中から古墳時代後期の須恵器甕が出土しており、先述の溝 SD5004 に関連する遺構である可能性が高い。



第382図 SX5028 平・断面図 出土遺物実測図

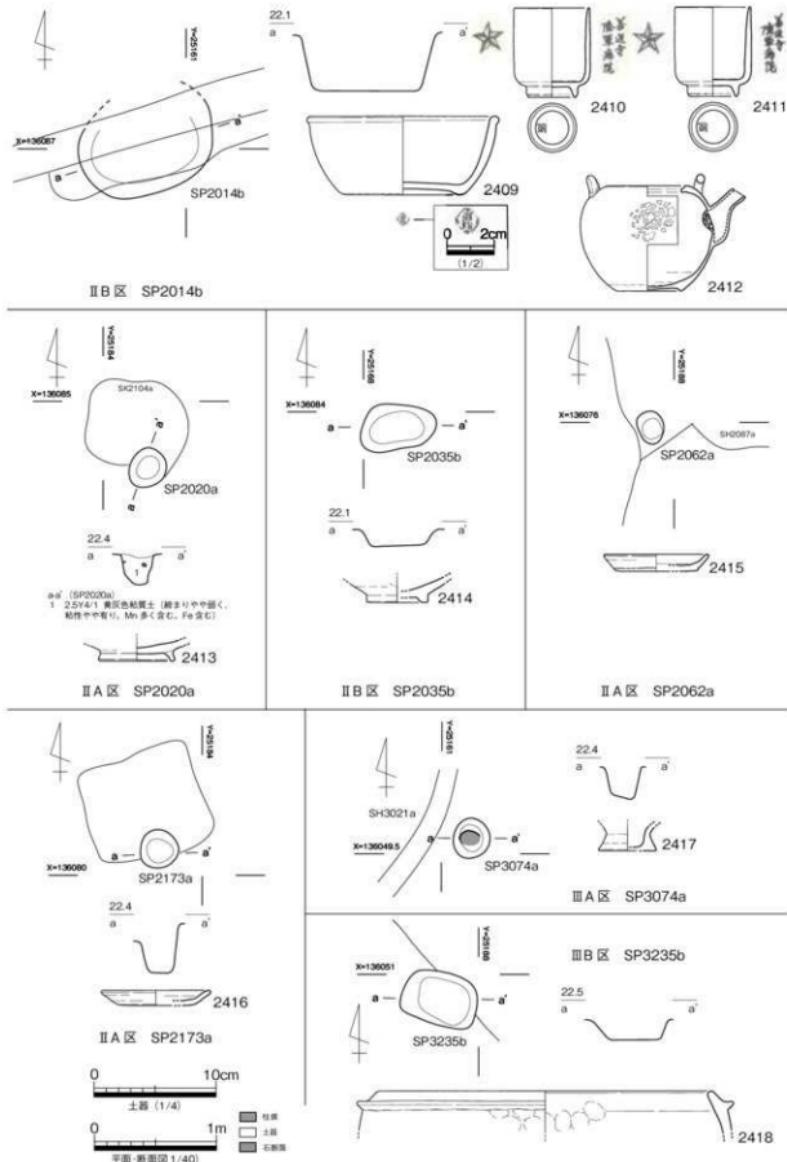
第5項 柱穴

建物に伴わない柱穴のうち、埋土や出土遺物の特徴から古墳時代後期以後に所属することが明確な遺構を報告する。

(1) 2 区の柱穴

2 区 SP2014b は長径 1.3 m、短径 0.7 m 以上の楕円形の土坑である。埋土中から第二次世界大戦以前の陸軍病院で使用した磁器が出土した。2409 はやや上げ底の盥碗である。口縁が玉縁となる。底面に「名陶」の呉須銘がある。2410・2411 は直口の湯飲み茶碗で底面に「カ」に片廻の刻印銘がある。外面には五光星の星章を中心配し、対面に「善通寺 陸軍病院」銘を記す。焼成後に劣化しやすい顔料で記されたもので、通常光では観察できず、斜光で辛うじて認める。2412 は磁器の急須である。外面に白絵付による文様を認める。

2 区 SP2020a は掘立柱建物 SB2394a の建物範囲内に位置する柱穴である。身舎西側柱のライン上にあることから、同建物の東柱の可能性がある。2413 は土師質土器の楕高台部で 12 世紀後半の所産。SB2394a と同時期とみて矛盾はない。



第383図 II・III区SP平・断面図 出土遺物実測図 古墳時代以降

2 区 SP2035b は条里溝 SD4002 の埋没土を切り込んで設けられた浅い土坑である。2414 は近世に所属する陶器碗である。

2 区 SP2062a は 2 区南で検出した小柱穴である。埋土中より 2415 の土師質土器小皿が出土した。13 世紀に所属する。

2 区 SP2173a は 2 区掘立柱建物 SB2394a の南で検出した小柱穴である。2416 は 12 世紀に所属する。

(2) 3 区の柱穴

3 区 SP3074a は掘立柱建物 SB3384a の西側梁行柱間に位置する柱穴である。12 世紀後半に特徴的な高台壇が出土しており、建物時期と矛盾ないことから建物の間柱として機能した可能性が高い。

3 区 SP3235b は SD4002a の埋土を切る浅い土坑である。埋土中で出土した 2418 は 13 世紀の土釜口縁で、SD4002a の埋没時期の下限を示す。

(3) 4 区の柱穴

4 区 SP4022b は 4 区北端付近で検出した小柱穴である。2419 は 11 世紀の土師器坏で、底面はへら切り後にナデ調整を行う。

4 区 SP4026b は 4 区北端付近で検出した小柱穴である。近世の磁器小皿 2420 が出土した。

4 区 SP4038b は 4 区北端付近で検出した小柱穴である。古代の須恵器坏片 2421 が出土した。8 ~ 9 世紀の建物遺構は確認していないことから、外所からの混入と判断する。

4 区 SP4274a は掘立柱建物 SB4295a の建物範囲内に位置する柱穴である。身舎南側柱列に合致することから束柱の可能性がある。2422 は埋土中出土の土師質土器碗で内面見込みに暗文風ヘラミガキを施す。12 世紀後半の所産で建物所属時期と矛盾しない。

4 区 SP4304a も掘立柱建物 SB4295a の建物範囲内に位置する柱穴だが、位置的に見て建物を構成する柱穴ではない。2423 は土師器碗で 11 世紀に属す。

(4) 5 区の柱穴

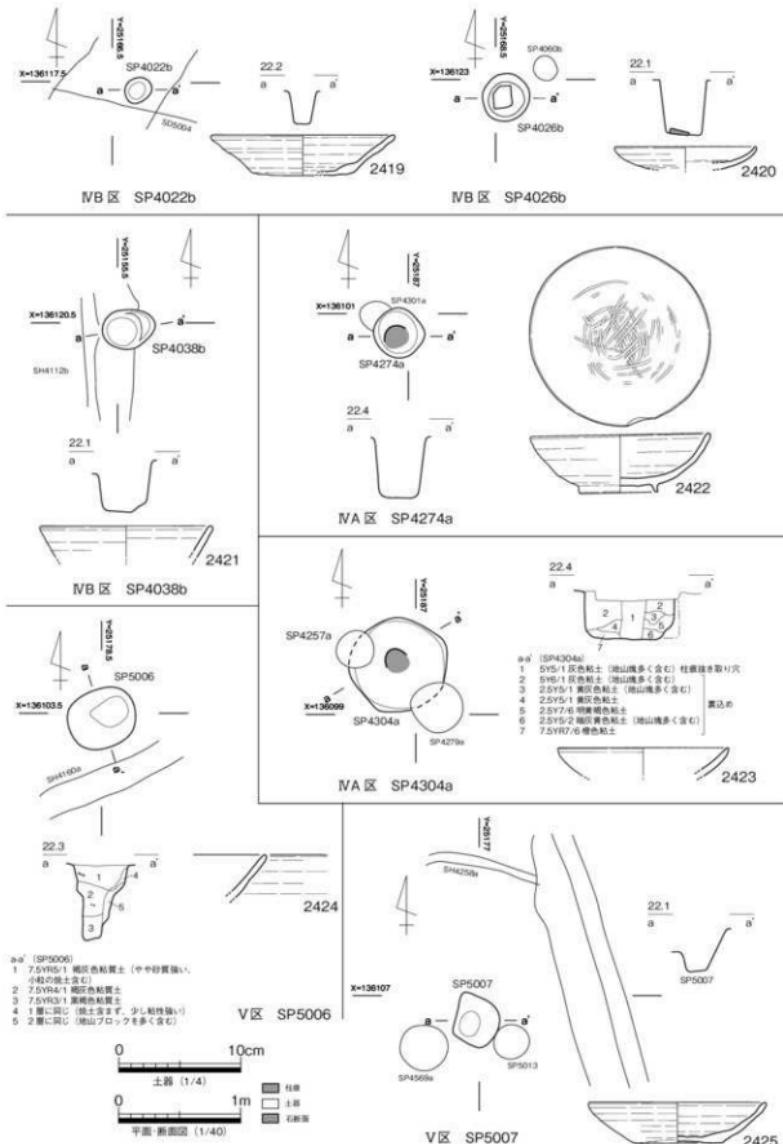
5 区 SP5006 は 5 区南端で検出した柱穴である。2424 の 11 世紀の土師器坏が出土した。

5 区 SP5007 は 5 区南端で検出した柱穴である。2425 の 11 世紀の土師器坏が出土した。

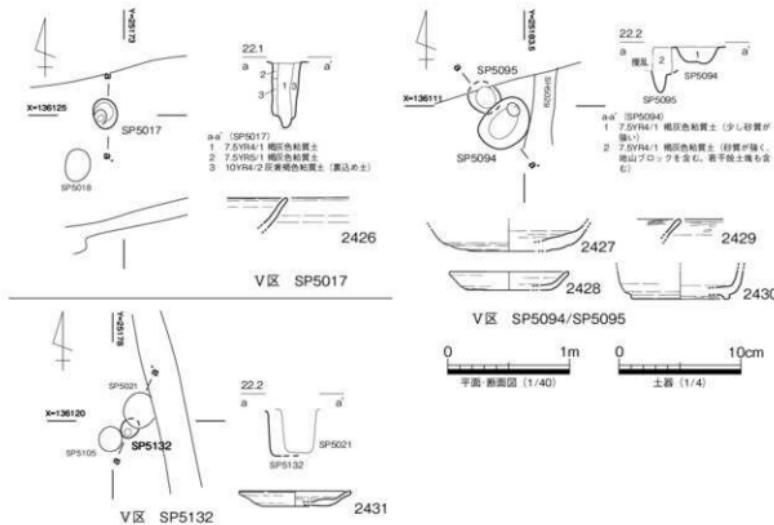
5 区 SP5017 は 5 区北端で検出した柱穴である。2426 の 11 世紀の土師器坏が出土した。

5 区 SP5094・SP5095 は 5 区南端で検出した柱穴である。古代から中世の土器が出土した。

5 区 SP5132 は 5 区中央付近で検出した小柱穴である。12 世紀の土師質土器小皿が出土した。



第384図 IV・V区 SP 平・断面図 出土遺物実測図 古墳時代以降



第 385 図 V区 SP 平・断面図 出土遺物実測図 2